

# ヒジキ試験養殖の取り組み支援

始良・伊佐地域振興局 林務水産課

## 【背景・目的】

近年の漁業を取り巻く環境は、資源の減少、魚価の低迷、燃油の高騰等、厳しい状況にある。沿岸漁業者の所得向上と安定を図るため、近年国産品の需要が高まるヒジキに着目し、鹿児島湾奥の静穏な海域特性を活用した養殖技術の導入を図った。

## 【普及の内容・特徴】

ヒジキ試験養殖の取り組みは、錦江漁協青壮年部により実施された。青壮年部では平成21年度から試験養殖に関する取り組みが行われており、22年度から24年度の3ケ年は、(社)全国豊かな海づくり推進協会による漁協等実践活動助成事業(事業主体：鹿児島湾水産業改良協議会)を活用した。

先進地の大分県等の技術を参考に地元産天然種苗を用いたロープ挟み込み浮き流し式による養殖技術を導入した。

設置漁場は、霧島市隼人町沖(錦江漁協：共同漁業権第43号、水深3～5m)、使用したロープは9～12mmのトラロープ(材質：ポリエチレン等)、その他、設置時の詳細は表1のとおり。

表1 錦江漁協青壮年部における年度別ヒジキ試験養殖設置状況

年 度	設置日	ロープ全長	ロープ長	セット数	間 隔	本 数	種苗長さ
H21年度	H22.2.23	50m	25m	2セット	10cm	5本	平均10cm
H22年度	H23.1.22	70m	35m	2セット	5cm	5本	平均15cm
H23年度	H24.1.24	140m	35m	4セット	5cm	3～5本	平均15cm
H24年度	H25.1.22	90m	30m	3セット	5～10cm	3～5本	平均15cm

## 【成果・活用】

天然ヒジキ同様に水温上昇期(3月以降)にヒジキの成長が見られ、特に4～5月にはかなりの生長が見られた。しかし、ヒジキの生長時期と付着生物の成長時期が重なるため、ヒジキの収穫時期の見極めが難しく、収穫時期が遅いと収量は多いものの付着物のため商品価値が下がり、時期が早いと付着物は少ないが収量も少ないという結果であった。

また、4ケ年の試験養殖の結果は表2のとおりであるが、毎年、付着物の優占種が変わる状況で、その対応が難しかった。平成22年度は、目標である単位重量当たり10kg/mをクリアしたもののイガイ類やコケムシ類が多く付着し、商品価値がないと考えられた。平成23年度は、他地区の付着物の情報があり、収穫日を早め、収量が少なかったにもかかわらず、ウミシバの一種と考えられる付着物が多い結果となった。平成24年度もこれまでと同様、早い時期から付着物が多く付き、収穫量は多かったものの商品価値がない結果となった。

表2 錦江漁協青壮年部における年度別ヒジキ試験養殖結果

年 度	収穫日	養殖日数	収穫重量	単位重量	収穫時長	備 考
H21年度	H22.5.14	81日	95kg	1.9kg/m	80～120cm	波浪による脱落
H22年度	H23.5.16	114日	748kg	10.7kg/m	100～150cm	付着物が多い(イガイ、コケムシ)
H23年度	H24.4.17	84日	253kg	1.8kg/m	50～100cm	付着物が多い(ウミシバの一種)
H24年度	H25.5.23	121日	750kg	8.3kg/m	80～130cm	付着物が多い(イガイ)

試験養殖結果は思ったような成果が得られなかったが、同時に区画漁業権(ヒジキ養殖)の免許取得について進めており、平成25年9月以降については、養殖に移行する計画となっている。

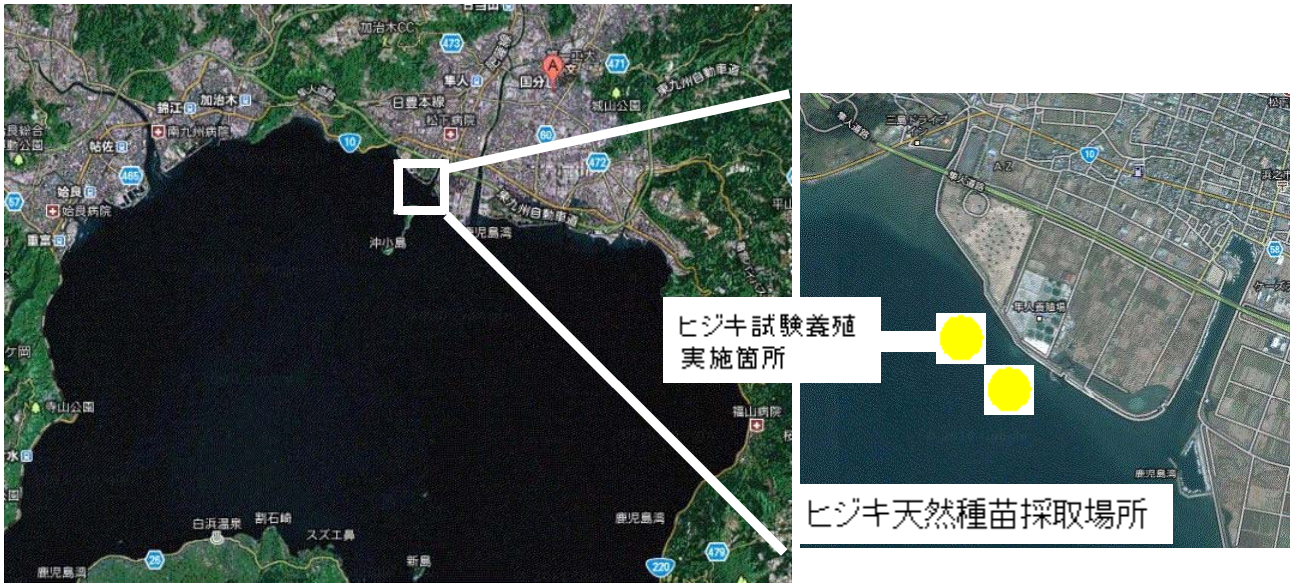


図1 ヒジキ養殖試験場所



図2 成長したヒジキ (H22年度試験)

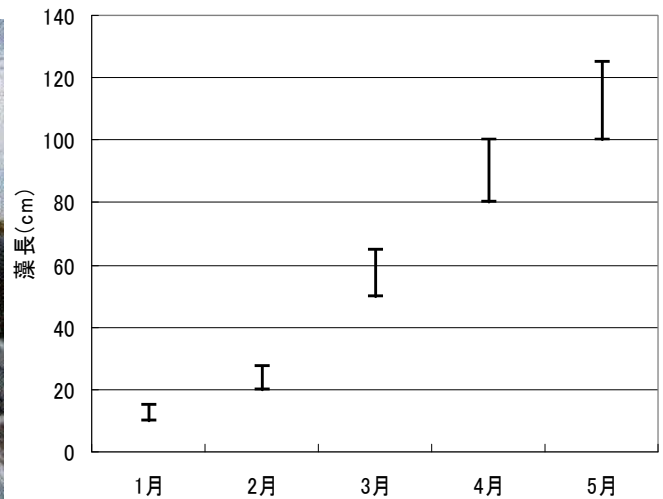


図3 ヒジキの成長の推移 (H22年度)



カラスガイ



ウミシバの一種



サメハダコケムシ

図4 ヒジキの商品価値を低下させる各種付着生物